

Come in!



海外オープン アクセス事情

7月に行われたSPARC Japan第2回
セミナー「海外ジャーナルの出版活
動、現状を知る」米国物理学協会事
務総長 John S Haynes氏の講演を
元に海外のオープンアクセス事情を
ご紹介します。

⑧ オープンアクセスジャーナルとは?

1990年代の「雑誌の危機」、2000年代初頭の電子化に伴う大手出版社の市場寡占化を経て、現在様々なオープンアクセス(以下OA)ジャーナルが誕生しています。OAジャーナルは電子ジャーナルの一形態ですが、以下のような特徴が挙げられます。

OAジャーナルの特徴 (Bailey Jr. による)

1. 無料で利用可能である
2. 著者に著作権の保有を許可する
3. クリエイティブ・コモンズや同種のライセンスを有するものがある


⑧ OAジャーナルモデル“How”と“When”

海外ではOAジャーナルの様々なビジネスモデルが開発されています。

「どのようにして」「いつ」公開されるかで大別され、「完全無料」「著者支払い・読者無料」「ハイブリッド」「一定期間後無料公開」「電子版のみ無料公開」という形があります。

個人・機関での無料公開

セルフアーカイビング



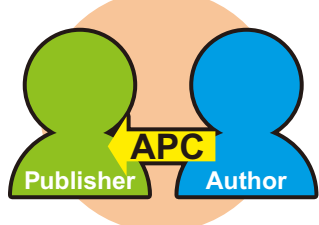
How?
研究者自らが原稿をウェブ上の個人・機関・主題リポジトリにアップする。

When?
刊行後即公開。

Memo
研究者の公式な出版活動とは区別される。
大半の出版社はセルフアーカイビングを許可しているが、金銭化やアップテイクの方法はほとんどない。

著者が出版社に「出版費」支払い

ハイブリッド型



How?
著者や所属機関や資金援助団体が Article Processing Charges (APC) を出版社に支払う。
APC ……論文処理料金とも言われる。原稿受理後の追加料金で、値段はジャーナルの重要度を反映しており、著名な出版社ほど高額。

When?
論文出版後ただちにアクセス可能となる。(論文単位の公開)
大半は途上国の著者においてはAPCを免除し、一定期間後公開(エンバゴ)している。

出版社などによる無料電子版

Born OA出版



How?
予約購読型の冊子体と共に無料の電子版を公開する。

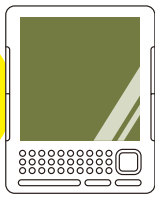
When?
刊行後即公開。

Memo
代表的なBorn OA出版社・団体
・ Hindawi Publishing Corporation (印・工学系)
・ BioMedCentral (2008年シュプリンガー社買収)
・ Public Library of Science

〈参考資料〉

- ・第2回 SPARC Japan セミナー2010「海外ジャーナルの出版活動、現状を知る」資料
(<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2010/20100706.html>)
- ・尾身朝子. 電子ジャーナルのオープンアクセスに関するNIHパブリックアクセスポリシーと国際動向. 東海大学紀要工学部 Vol. 45, No.2. 2005, pp.11-17. (<http://ci.nii.ac.jp/naid/110005051879>)
- ・三根慎二. オープンアクセスジャーナルの現状. 大学図書館研究 LXXX (2007.8)
(http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/bitstream/2237/10118/1/open_access_journal.pdf)

Amazon Kindle



Amazon社KindleやApple社iPadなど、米国発の端末が日本でもメディアに取り上げられ、電子書籍がクローズアップされる機会が多くなりました。今年「電子書籍元年」とも言われています。電子書籍の普及は業界や作家・読者にどのような影響を及ぼすのか、2010年7月20日の毎日新聞の記事を中心に概観してみたいと思います。

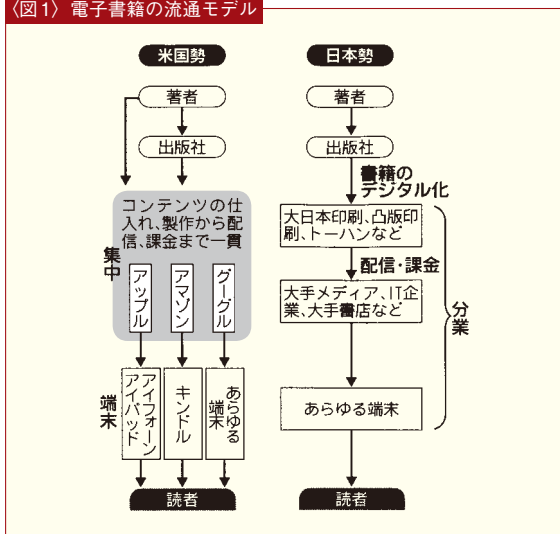


Apple iPad

電子書籍の流通モデル

米国においては、電子書籍の流通（作家からの作品の仕入れ→電子書籍製作→配信・課金・端末の発売）はAmazon社やApple社といったネット企業に独占されています。この米国主導の流通モデルが日本に持ち込まれると、印刷や流通業者を排除する“中抜き”が起きかねません。そのことに危機感を抱いた大手出版社・大手書店・端末メーカー・通信会社などが集まり、印刷や書店を含めた書籍業界の分業体制を維持した「日本独自の電子書籍の出版・流通モデル」を構築しようとする動きが出ています（図1参照）。この日本型モデル構築では、本業の印刷業では激しい市場競争を続ける単社世界1位の大日本印刷とグループ世界1位の凸版印刷（単社同3位）が手を結んでいます。

【図1】電子書籍の流通モデル



紙の本と電子書籍

電子書籍は、定価販売を義務付けた「再販制度」の対象外であることから、価格設定は自由です。また、作家に「印税」として入る取り分は、紙の書籍が価格の1割程度なのに対し、電子書籍では、印刷や流通にコストがかからないために最大7割にもなります（図2参照）。

【図2】電子書籍と紙の本の比較

電子書籍	紙の本
新刊を定価販売する再販制度が適用されず、自由に価格が決められ、割安	印刷や配送費用がかかり、再販制度も適用されるため、割高
最大7割	1割程度
販売価格に占める作家の取り分	
パソコンや1台数万円の端末が必要。端末に大量の作品が保存できる。作品が紙の本に比べて圧倒的に少ない。多くの図書館が電子書籍に対応していない	作品の数が豊富。図書館で無料で借りられる。専門書など部数が限られるものは非常に高額
特徴	

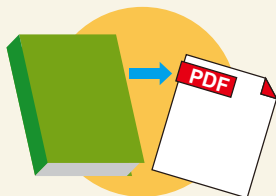
日本の電子書籍の現状と未来

日本の電子書籍市場が2009年度で574億円（推定）だったのに対し、アメリカの市場規模は2009年で3億1300万ドル（約282億円；アメリカ出版社協会（AAP）の集計による）であり、実は日本よりも低い額にとどまっています。ただし、日本の電子書籍の売上げの80%以上が携帯電話向けのコミックを中心とした配信で、米国におけるPCやKindleに代表される電子書籍リーダーによる文芸中心の配信とは様相を異にしています。

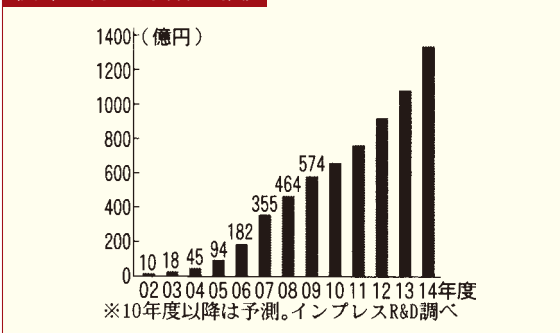
今後は、日本においても電子書籍リーダーによる配信が増えるのは必至でしょう。ただし、米国では紙媒体のハードカバーの平均価格が26ドルと日本に比べてかなり高額であることから、その半額以下の価格設定としたことが電子書籍が急速に普及したひとつの大きな要因とも考えられています。日本においては文庫本や新書が安価で手に入りますし、単行本も多くが1000円台で買えることから、米国ほど急速な普及には至らないのではないか、と見る向きもあります。

電子書籍の「自炊」とはなんぞ？

電子書籍の「自炊」とは、本を裁断してスキャナーを使い、自前でデジタルデータを作製することで、現在出回っている電子書籍の数が少ない、手持ちの色褪せた本もデジタルデータ化することで見やすくなる、などといった理由から、「自炊」をする人が増えています。裁断からデータ化まで一括して請け負う業者も出てきていますが、「業者が複製することは私的使用の範囲を超えており、著作権法に触れる」との声も上がっています。



【図3】国内の電子書籍の推移



図表：2010年7月20日毎日新聞より



(独) 科学技術振興機構(JST)は各地で順次開催している【J-STAGEセミナー／利用学協会意見交換会】を8月27日京都でも開催しました。

中西印刷に事務局を置く4学会を含めて約20学協会39名が参加しました。

本年4月の第二次事業仕分けでは「縮減」意見の対象となったJ-STAGE事業ですが、「基本的に事業の必要性が認められた」(当日談)の認識で、J-STAGE3の開発を予定通り進めると報告されました。簡単に内容をレポートします。

J-STAGE 10年の到達点

スタートして10周年を迎えたJ-STAGEはテスト運用を経て現在2が運用されています。様々な試行錯誤はありましたが、この到達点として参加学会誌数は600を超え利用学協会数は570団体に達しました。【資料1】

平成22年6月段階で登録記事数は30万件超、5月の月間全文コンテンツ(PDF)閲覧数は約133万件をカウントしています。公開ジャーナルの分野別誌数は資料2の分類で医学・薬学系(198誌)と工学系(171誌)で60%を占めています。これら総数の内76.5%がFree公開のオープンアクセスです。

またJ-STAGEと並行して進められた電子アーカイブ事業(Journal@rchive)での公開論文数も平成22年7月末時点で117万件となっています。

待望された国際標準規格の電子ジャーナル

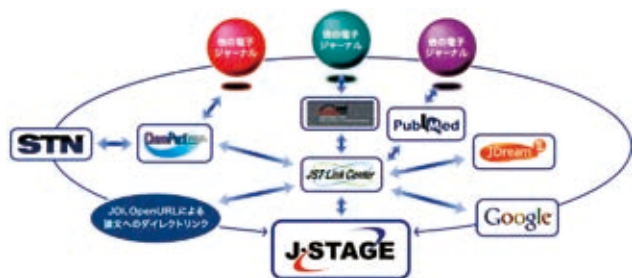
しかしこれまでの2はHTML/BIB形式+PDFの公開で、世界の電子ジャーナル(On Line Journal)の規格には合致しない、学術研究情報の国際流通に遅れを取るものでした。国内の研究者からは国際標準規格へのグレードアップが強く望まれていました。そういった研究者の渴望を背景にJSTが開発に着手したのがJ-STAGE3です。この3では世界規格であるXML形式に完全に対応するものとなり、その場合恐らくPubMed Central(PMC)などが導入しているNLM(National Library of Medicine)-DTDが採用されるものと思われます。

JSTでは2012年(平成24年)3月からの公開本格稼働を目指して開発を進める予定です。

変わる国産OLJの環境

このJ-STAGE3の開発・運用開始に伴ってこれまで取り扱われていた幾つかのサービスに変化が生じます。資料3の諸点です。

また、XMLデータの構築についてJ-STAGEはあくまでプラットフォームの提供で、データの提供は学協会側の作業である事も説明されました。



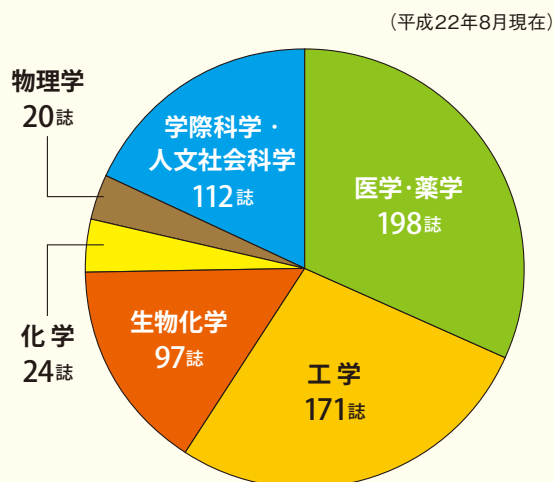
J-STAGEのリンク網

【資料1】 J-STAGE を利用している学協会・ジャーナル数等

	公開誌数 (誌名変更分を別資料としてカウント)	利用申請数	利用学協会数
ジャーナル	633	707	570
報告書	10	10	9
予稿集	125	170	136
計	768	887	715*

(平成22年8月現在)
*重複を除いてカウント

【資料2】 J-STAGE 公開ジャーナル 分野別誌数



【資料3】 J-STAGE3からのサービスの変化

- 1) API機能の新たな付加によって、現在公開のJ-STAGEと過去分のJournal@rchiveが同時に検索可能となります。
- 2) 投稿審査システムはJ-STAGEでの開発は中止され、外部システムのパッケージソフトウェアを導入する方向での検討となります。
- 3) 大会演題登録システムも平成20年から新規申請の受付中止、平成23年度末(平成24年3月末)でのシステム運用停止となります。

04 弊社専務の本が出版されました

TOPICS



この度、弊社専務の本「我、電子書籍の抵抗勢力たらんと欲す」が出版されました。業界誌「印刷雑誌」に掲載されたコラムに、個人ブログの記事を加え、再編集したものです。

インターネットの普及に伴っての印刷業態の大きな変化や、電子書籍が台頭し印刷需要の減少が不安視される時代の経営の苦悩や奮闘が描かれています。

我、電子書籍の抵抗勢力たらんと欲す

中西秀彦著／印刷学会出版部刊、2010年7月発行。

Amazonでも購入できます。

〈目次一部紹介〉
IT時代の中小印刷業
印刷通販の未来は
印刷はどこへ行くのか
図書館関係者の憂鬱
本はネットブックに勝てるのか…etc.

編集後記

本 情報誌も創刊準備のゼロ号を含めて8回の発行に達しました。学会事業に関するリアルでタイムリーな話題を紹介するまでにはまだまだですが、一定の基礎はできたかと思います。一旦第一期編集委員会は解散して新たなメンバーで第二期の発行を続けます。イベント情報のご提供など引き続き宜しくお願いします。京都は紅葉の季節に移ろいつつあります。(第一期チームリーダー／井上俊幸)

前 号・今号と電子書籍に関する記事を担当させていただきました。技術の進歩と共に情報の提供の仕方が大きく変わっていくのを日々感じています。これからも乗り遅れないように勉強していきたいと思っています。(編集校正課／楠林 聡)

こ の1年で出版・印刷は大きく変化しました。情報収集に奔走したり、同業・異業種の方々の「つぶやき」を眺めたりする中で、地殻変動をリアルに感じる毎日です。立ち尽くすことなく、この景観をいかに楽しみ、いかに歩んで行くか。様々な声を道標に、これからも進んで行きたいと思っています。(プリプレス課／石川衣沙)

何 だか最近電子書籍の話題ばかりですが、あまり普及が急速だとこの業界どんな風になるのか……。新しいビジネスモデルが見えるまで時間稼ぎしたい心境にもなりますが、なんとか生き延びたいと思っています。(営業課／太田行政)

最 近、学会事務委託のお問い合わせが増えております。いろいろな学会の特徴も理解した上で、より効率的な事務業務ができるよう精進したいと思います。夢は、担当学会からノーベル賞受賞者がでる事、でしょうか…。(学会部／森川佳奈)

今 回で7号を迎えた学会情報誌ですが、先生方から「楽しみにしていた」「次号はいつなのか」と仰っていただけると作成する私たちの励みになります。引き続き旬な情報と先生方からの貴重な声を誌面作りに反映させていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひします。(学会部／安部幸子)

京 都大学で開催されている「春秋講義」を受講してきました。テーマが「電子書籍と出版～電子化の中の大学図書館～」ということもあり、非常に興味深く拝聴することができました。弊社でも深く取り組んでいるオンラインジャーナルや機関りポジトリなどを通じて、先生方の研究をより広く発信するためのお手伝いが出来ればと思います。(DTP課／山口文吾)